

平成26年度スーパーバイザー事業報告書

研究テーマ 豊かな心情を育み、主体的に行動できるたくましい幼児児童生徒を育てる
～キャリア教育に視点を当てて～

鳥取県立鳥取聾学校

スーパーバイザー：金沢大学 武居 渡 教授

1 はじめに

<本校の幼児児童生徒の特長>

明るく元気で何事にも一生懸命に取り組むことができ、人との関わりを好み、求めている。一方で、自信がなく失敗を恐れて消極的になったり、自分の思いを伝え、他者の思いを受け止めたりすることに課題を生じていることが多い。また、聴覚障がいによるコミュニケーションや言語獲得・拡充の困難さにより、基礎学力の定着や言語に関する様々な課題を生じている場合も多い。

<学校経営の基本方針>

- ・ 確かな学力の定着を図る学習指導の充実
- ・ 自立と社会参加をめざしたキャリア教育の充実
- ・ 豊かな自己表現力の育成（コミュニケーション力の向上）

<校内研究>

- ▶ 「学ぶ」グループ
- ▶ 「知る」グループ
- ▶ 「表す」グループ

<校内研究体制>

<学校教育目標> **豊かな心とたくましく生きる力を持つ子ども**

豊かな心情を育み、主体的に行動できるたくましい幼児児童生徒を育てる
～一人一人のニーズに応じた教育内容の工夫～

幼児児童生徒一人一人の実態やニーズに応じた指導

地域支援部
知る

幼稚部
表す

小学部
学ぶ

中学部
表す

高等部
学ぶ・知る

一貫した教育・鳥取聾学校としての系統的・段階的指導

<学ぶ>
確かな学力
各教科等

<知る>
自己理解・自己管理能力
自立活動等

<表す>
伝え合う力
朝の会・自立活動・LHR
総合的な学習の時間

2 研究目標

豊かな心とたくましく生きる力を育てるために、学部を越えた系統的・段階的な指導を基盤としながら、幼児児童生徒を総合的・多面的に捉え、一人一人の実態やニーズに応じた適切な指導と支援を行う。

3 取組の内容

本研究会における発表内容は本校のキャリア発達支援段階表の活用と高等部知るグループの取組を中心にまとめた。

(1) 系統的・段階的な指導

① キャリア発達支援段階表の活用

「自己理解・自己管理能力」の領域についてどの幼児児童生徒も取り組むことを呼びかけた。個別の年間指導計画の目標にはキャリア発達支援段階表を参考にしながら「自己理解・自己管理能力」に関する目標を設定して取り組むようにした。

<キャリア発達支援段階表>

オ、聞こえの理解			補聴器等が大切なものであることを知る。 聴力測定に慣れる。	補聴器等が大切なものであることを知る。 聴力測定を決まりよく受ける。	状況に応じて着け外しをすることができる。補聴器、人工内耳の装用の必要性に気付く。
----------	--	--	----------------------------------	---------------------------------------	--

<自立活動 年間指導計画>

目標	<ul style="list-style-type: none"> ・相手と目線を合わせ、主述の係りに気を付けながら、思いや経験を伝える。(心理的な安定-2、人間関係の形成1・2、コミュニケーション1・2) (伝え合うカー表Ⅲ④) ・5W1Hを意識し、文を読んで理解したり、豊かな文章を書いたりする。(心理的な安定-2、コミュニケーション2・3) ・舌の構えや息の出し方、口形を意識して発音しようとする。(環境の把握-2、コミュニケーション-1) ・様々な運動に取り組み、バランス感覚や筋力を高める。(環境の把握-5、身体の動き-1・3) ・補聴器、人工内耳装用の必要性に気付く。 (キャリア(B)Ⅲオ)
----	--

(2) 幼児児童生徒の総合的・多面的な捉え

「個を語る会」を年間3回開き、「自己理解・自己管理能力」に関する個々の生徒の課題について話し合った。担任だけでなく、各教科・領域、部活動など、様々な場面について高等部の職員全員から情報を集めたことにより、主訴に関する共通の課題を見出すことができた。また、課題に対してどのような力が必要になるか、その力を身に付けるためにはどのような指導や支援の方法が有効であるかについても検討した。検討した内容は「知るグループニュース」にまとめ、高等部全体で取り組むことができるようにした。



(3) 一人一人の実態やニーズに応じた適切な指導と支援

①自己評価表の導入

自立活動では、自分の長所や短所、できることやできないことを受け止め、新たな課題と目標を見つけ、それに向けて主体的に考えたり行動したりする力が必要だと考え、自己評価表を導入した。自立活動の学習の流れを①本時の目標の確認②学習③振り返り（目標の達成状況、課題、これから取り組みたいこと）と統一した。教師は、生徒が適切に学習や自己を振り返り要点をまとめて書くことができるよう、適宜個別に支援した。自己評価表を導入後、援助を求めることが苦手な生徒が自ら教師に相談する姿が見られたなど、成果が現れつつある。自己評価表に記入したから終わりではなく、自己評価の内容を教師が把握し、日々の生活の中で生徒に意識づけることが今後も必要である。

<自己評価表の例>

11月12日(水)	本時の目標「自分の家族とのコミュニケーションを振返る。」
1	本時の目標は達成できたか できた。3人の親の失敗の経験、コダが成長後の様子を知らなかった。
2	自分の課題 自分から手話を使うことが少ない。(負い目がある?)
3	これから取り組みたいこと 家でも手話を積極的につかう 手話に誇りをもつ

自分の課題

自分から手話を使うことが少ない。
(負い目がある?)

11月19日(水)	本時の目標「以前考えた困るかもしれない人の対応を考えよう。」
1	本時の目標は達成できたか できたかなと思います。
2	自分の課題 6Aと比べて、同窓会大学に行って3人の3人者の先輩から教えてもらったこととどう違うのかの意見出しができた。
3	これから取り組みたいこと まだまだ決まらないうえに、大学や専門学校に通う前にそれもし、情報発信が無い場合は自分でどう発信していくか? 障がいのことを理解するにはどう伝えるのか? 自分次第で考えたいことを思い出した。もうすぐ、情報発信する時期が来たので、人に伝える方法を考える。

取り組みたいこと

障がいを理解してもらうためには、どう伝えたらよいか。

②全体授業研究会 高等部3年の自立活動「聞こえない両親の育児から学ぶ」

将来、コダの子どもに「手話」と「口話」のどちらのコミュニケーションモードで育児をするかをテーマに、手話派と口話派に分かれてディベートを行った。生徒は自分の経験を思い起こしながらそれぞれの立場でメリットやデメリットを考え、主張し合ったり問題点を投げかけたりした。障がいを受け入れ自分らしく生きることについて考える良いきっかけとなった。



授業参観の際には参観シートを用い、参観の視点に沿って付箋に意見を書き込んでもらうようにした。ねらいにより迫るための授業の工夫について学部を越えて意見を集め、授業改善に役立てることができた。授業研究会では、「自己理解・自己管理能力」に関する各学部の取組について情報交換し、縦のつながりを再確認する機会となった。



※コダ…聴覚障がい者の両親をもつ健聴の子ども

4 スーパーバイザーの役割

金沢大学人間社会研究域学校教育系武居渡教授に年間2回来校していただき、講演や校内研究に関する指導助言をいただいた。

(1) 講演「手話の言語発達」「授業における手話の活用」

聞こえない子どもにとって、「手話」は分かるコミュニケーションを可能にするものであり、自らの障がいを肯定的にとらえ健聴者と対等に生きていく原動力となる。手話はろう者としてのアイデンティティの形成に大きな役割を果たす。今後、各学部において手話をどう位置づけ扱っていくかが検討課題である。



(2) 校内研究に関する指導助言

①高等部3年の自立活動「聞こえない両親の育児から学ぶ」

全国の豊学校でコードを取り上げた実践例はなく、興味深い授業であった。今後、自分が聞こえないということをどうやって自分の子どもに伝えるか、そこまで踏み込んだ授業をしてほしい。また、自分を客観的に見ることができる中高の生徒にとって自己評価表は有効である。毎回自己評価を書き、卒業する時にそれを読み返し、自分がどう変わったか振り返る活動をぜひとも取り入れてほしい。

②キャリア発達支援段階表の活用方法について

今後は、キャリア発達支援段階表に具体的な授業事例を付け加えてデータベース化し、実践の蓄積と段階表の検証を行っていくと良い。障がい認識のゴールは「自分の聞こえにくさを自分の言葉で伝えること」であり、社会に貢献する力につながる。キャリア発達支援段階表はそれを可能にする指標として、個に応じた授業づくりのツールとして活用していくことが重要である。

5 研究のまとめ

(1) 成果

- ・「自己理解・自己管理能力」について年間指導計画に盛り込むということ、学校全体の取組とした。
- ・「個を語る会」によって、総合的・多面的に捉え、指導や支援の共通理解をすることができた。
- ・「自己評価表」を導入し、生徒が自己を振り返る機会を作った。

(2) 課題

- ・「自己理解・自己管理能力」以外の領域を含め、総合的にキャリア教育に取り組む。
- ・キャリア発達支援段階表の活用方法を整え、学校全体で取り組む体制をつくる。
- ・実践の蓄積とキャリア発達支援段階表の検証を行う。

6 おわりに

本事業を通して武居教授には、「自己理解・自己管理能力」について、また研究の進め方について、多くを学ばせて頂いた。課題は山積しているが、助言して頂いたことを実行に移し、本校の子どもたちの豊かな心とたくましく生きる力を育むキャリア教育の推進に向けて努力していきたい。